

ジュゼッペ・ヴェルディは、その長い人生において、常に自分自身に疑問を投げかけ、自らの音楽のスタイルを変貌させていきました。彼の処女作『オベルト』と最後の『ファルスタッフ』を比べると、およそ同じ人物が作曲したものとは思えないほどです。19世紀末という大変革の時代を生き、伝統的なイタリアオペラの世界を発展させ、20世紀の世界に橋を渡したことは、ヴェルディの功績なくしてはありえません。

しかし、ヴェルディは、モーツァルトのようなほかの偉大な作曲家とは違い、幼い頃からアカデミックな音楽の英才教育を受けていたわけではありません。彼は決して豊かでない村に生まれ、牧師にオルガンを教わるころからその音楽人生を始めました。彼の出自からは、当時のイタリアの地方都市で聴ける音楽の姿が見えてきます。それはイタリアのよき伝統の中のオペラであったのです。

ヴェルディの初期の作品には、それがよく反映されています。処女作『オベルト』は、当時のイタリアオペラの伝統的な書法が守られており、続く『一日だけの王様』は、彼の唯一のブッフアで、ロッシェニ的な世界を作ろうとし、結果上手くはいきませんでした。このまま作曲家としてのキャリアを続けていくことが出来るのか、という危機感の中、生まれたのが続く『ナブッコ』です。この作品で初めて彼自身の個性がはっきりと反映されました。すなわち、あの動的なリズムと興奮、息をつかせないドラマ、憑かれたような音楽がすでにここに表れたのです。

その後、ヴェルディは、いわば工房的に作曲の技術を磨いていく一方で、コスモポリタンのロマン派の理想や思想を吸収していきました。ロマン派のシラーやユゴー、そして、ヴェルディにとって最も大切なシェイクスピアの作品から、オペラの題材を吟味したことが、彼のオペラのめざましい発展に大きく寄与しました。

ヴェルディが、文豪たちの物語によってイタリアオペラを変革したかったことは何か。それは、これまで仮面的、典型的に描かれていた登場人物に、感情や心理面での個性を与えることでした。すなわち登場人物の「人間」に光を与えること自体が、ヴェルディの新しさだったのです。

それに加えて、彼はドイツの管弦楽法を学ぶことで、イタリアオペラのオーケストラの音色を豊かなものに変えていきました。彼によってオーケストラは、単なる歌の伴奏から、いわばドラマの基調をなす色を作り、台本では語られない感情やスピリットを語るものへと変化を遂げたのです。

ヴェルディの管弦楽の研究は、序曲にそれがよく表れています。『ナブッコ』のそれは、ロッシェニ的な書法でオペラの中のテーマがいくつもコラージュされ書かれた名品ですが、後年の『ルイザ・ミラー』では、ドイツの管弦楽の影響を受けて、ひとつの主題を発展させるという形をとっており、このテーマがオペラ本篇にも何度も登場することでまるでライトモチーフのような働きもしています。また主題のほかにはいくつかわれる動機がオペラ全体をとおして変容していくところからは、はっきりとウェーバーやベートーヴェン

の影響が見て取れます。

次に、ヴェルディの音楽に明らかな影響を与えたものは、フランスオペラです。パリ・オペラ座での多くの仕事の最中パリに長期滞在していたヴェルディは、サロンや劇場を訪れながら、その音楽のエッセンスを吸収していきました。

『イル・トロヴァトーレ』においても、フランスオペラの影響が、全体の構成や合唱の手法などに見て取ることができます。

また、正式な呼称ではありませんが、自分が「セミ・セーリア」と呼んでいるような半分シリアスで半分コミカルな要素を持った作品は、フランスオペラの影響から生まれました。

『仮面舞踏会』などがそうですし、あるいは『運命の力』もそこに連ねてよいかもしれません。

そして最後の作品『ファルスタッフ』には、ワーグナーの影響がみてとれます。それは直接的なものではなく、台本作家で自らも作曲家であったアッリーゴ・ボーイトを通してのものでした。イタリアでも一般的にはほとんど認識されていないのですが、この時代のイタリアオペラにおけるボーイトの影響というものはたいへん大きいものだと思います。例えば、彼のオペラ『メフィストフェレ』を私は最高傑作だと思っているのですが、その影響は、ヴェルディにも『オテロ』のヤーゴのような新しい人物の描き方に表れています。

ヴェルディが晩年ボーイトを通して間接的にワーグナーにアプローチしていったということは、イタリアのみならず当時のオペラ界全体が大きく変化していたということとともに考えるべきでしょう。ワーグナーのコンセプトのいくつかは、ヴェルディもまた持っていたものであったと思います。生涯を通じて、ヴェルディはスポンジのように様々な文化を吸収していきましたが、それは晩年になっても変わることはなかったということ、そしてそれが、イタリアオペラの 20 世紀の世界を拓いたのです。

ロマン派の時期を代表する 3 部作のひとつ『イル・トロヴァトーレ』の原作は、グレティエスによるスペインの戯曲です。この原作はひじょうに暗く、夜的な世界で、魔女や子どもを殺す話、戦争や死が語られています。この時期のヴェルディが、こうした奇妙でグロテスクな世界に惹かれていたということは言えると思います。前作『リゴレット』も、せむし男が主人公で、その娘が凌辱され殺されるという猟奇的な物語でした。彼はこうした世界を描くことによって、イタリアオペラに新風を送ろうと考えたのでしょう。

『イル・トロヴァトーレ』でも同様に、当初ヴェルディが主人公にしようとしたのは、ジプシー女のアズチーナでした。物語の中で、アズチーナは過去を物語るという場面が多く登場します。彼女の有名な登場の aria 「炎は燃えて」も、かつて自分の母が火刑に処されたシーンを回想して語ります。ヴェルディは、ここをイタリアオペラの伝統的な登場の aria として書いただけではなく、フランス的な「バウラータ」という音楽形式を使

いました。これはアリアというよりもカンツォーネ的な要素を持つもので、音楽がストーリーを物語ることにとても適した形式でありました。また先ほどもお話したように、合唱の使い方が、とてもフランスオペラ的です。

ヴェルディが残したオペラの中でも、『イル・トロヴァトーレ』は生前格別の大成功を収めた作品です。こんにちの私たちからすると「なぜ？」と思えてしまうのですが、その理由は、このオペラが新奇性を持ちながらも、その時期のイタリアオペラの伝統的な形式を明確に保っていた点にあると思います。前作の『リゴレット』は新しい要素が強烈で、観客にとってけっして消化しやすい作品ではありませんでした。だからこそ『リゴレット』はイタリアオペラを大きく前進させた傑作であるのですが、ヴェルディ自身も、少しやりすぎたと思ったのではないのでしょうか。それで彼は『イル・トロヴァトーレ』では、奇妙な世界を題材に選びつつ、それを保守的な形式の中で描いたのでしょう。

またこのオペラの成功には、カンマラーノの台本も大きく貢献したと言えるでしょう。カンマラーノは、ドニゼッティ『ランメルモールのルチア』などを書いて、当代一流の台本作家でしたから、保守的な観客には、実際には奇妙で複雑な筋書きであっても、伝統的な形式の中での成功をいわば保証するものであったと思います。構成は秀逸で、オペラに典型的な4人の登場人物に声種もうまく配分されています。そこにつけられたヴェルディの音楽は、溢れるようにたくさんの美しいメロディがたいへん効果的で、観客の脳裏に、それぞれの登場人物を焼き付けるような、強烈な印象を残します。

*イタリア人指揮者としてヴェルディのオペラを指揮するということは？*

毎回が非常に大きな挑戦です。これまで申し上げてきたように、ヴェルディはその長い人生の中で常に前進しようとしていましたし、自身の音楽の姿を大きく変えていきましたから、私たちは、それぞれの作品を演奏するときそのことをきちんと理解しなければなりません。すなわちこの音楽の意味や性格は何なのか、どういったキャラクター、音色、そして声のスタイルを使っているのかについて、深く掘り下げなければならないのです。そのためには彼の音楽だけでなく、イタリアやヨーロッパの歴史、時代、ヴェルディの人生についても学ばなければなりません。

*これまでの録音の中で自身がこれだと思う『イル・トロヴァトーレ』の録音は？*

実は、『イル・トロヴァトーレ』では、心の底から決定的な録音にまだ出会っていません。このオペラは音楽の解釈が非常に難しいのです。ここに2つの典型的なアプローチがあり

ます。ひとつは、『オテロ』や改定後の『シモン・ボッカネグラ』といった後年の作品から遡って、『イル・トロヴァトーレ』を読み解いていくという手法。深い音色を得ながらも、作品の流れをとどめ、重い演奏になりがちです。

一方、ヴェルディのそれまでの時代から読み解いていく手法。テンポは早くなり、声のスタイルもその時代の、ベルカント様式のものが使われます。

『イル・トロヴァトーレ』は、そのどちらにも陥り切ることのないポジションにあるべきで、私はまだそうした演奏に出会ったことがありませんし、自分ならできるとも思っていない。それはほとんど不可能に近いことなのかもしれません。

『イル・トロヴァトーレ』の最後のシーンをどうとらえているか？

『イル・トロヴァトーレ』の筋書きには、ひとりひとりがそれぞれの解釈を持つしかありません。現代の私たちからみて合理的に読み解くことは難しいでしょう。むしろヴェルディは、観客に色々な解釈を投げかけようとしていました。

その証拠は最後の場面です。台本作家のカンマラーノは、アズチーナが悲しみを語る長い場面を書くつもりでしたが、ヴェルディはそれをさせませんでした。音楽も物語も敢えて高いテンションのまま、まるで壁にぶつかるように終わり、人々は驚きの感情をもって様々な解釈をめぐらせることになったのです。